

総務建設常任委員会視察報告

総務建設常任委員会は、去る6月21日から22日までの2日間、富山県氷見市及び石川県七尾市内の株式会社御祓川を訪問し、次のとおり視察を実施しました。

○ 視 察 日

平成28年6月21日（火）及び22日（水）

○ 視察地及び視察目的

1 富山県氷見市役所

- (1) 学校施設を活用した市庁舎整備について
- (2) フューチャーセンターについて

2 株式会社 みそぎがわ 御祓川（富山県七尾市）

中心市街地のまちづくりについて（七尾マリンシティ構想）

○ 視 察 者

横山すみ子委員長、鈴木道子副委員長、畑中由喜子委員、石岡実成委員、伊東圭介委員、土佐洋子委員、近藤昇一議長（オブザーバー）、
（随行 廣瀬英之事務局次長）

◇ 氷見市視察の概要

1 氷見市の概要

氷見市は、富山県の西北、能登半島の東側付け根部分に位置し、面積は230.56平方キロメートル、人口49,464人の都市です。日本海岸有数の氷見漁港には、四季を通じて156種類もの魚が水揚げされ、初夏の「マグロ」、冬の「寒ブリ」、そして「氷見いわし」は広辞苑にも掲載されるほど有名です。また、日本ではじめて発見された洞窟住居跡「大境洞窟」や万葉の歌人大伴家持ゆかりの史跡など、歴史のロマンにも満ちあふれています。さらに、近年は市内各地で温泉が湧出し「能登半島国定公園・氷見温泉郷」の名称でPRに努めているまちでもあります。

2 学校施設を活用した市庁舎整備について

(1) 市庁舎整備の背景（現状と課題）

平成23年10月から約半年間かけて市庁舎（本庁舎）の耐震診断調査を実施したところ、耐震性能を表すIs値（構造耐震指標）が基準

値を大きく下回り、震度 6 強クラスの地震に対して、建物が倒壊し、または崩壊する危険性が高いとされました。また、富山県が発表した津波シミュレーション調査結果によると、市庁舎（本庁舎）は糸魚川沖地震による津波の浸水想定区域内に位置づけられました。

市庁舎の本館は、昭和 43 年の竣工、別館は昭和 34 年の竣工であり建物はもとより設備も老朽化が著しいこと、駐車スペースの不足などの課題も抱えていたことから、数年後には建替えを検討する必要がありました。

(2) 市庁舎の整備の必要性及び整備方法

東日本大震災の教訓を踏まえ、地震や津波等の災害時における行政機能の維持及び防災拠点機能の強化が求められていることから、耐震性等に不備のある現在の市庁舎（本庁舎）を地域防災上の観点から緊急に整備し、災害に強いまちづくりを進める必要がありました。

整備方法については、次の 7 つの選択肢が想定され、市議会に設置された「市庁舎整備検討特別委員会」において比較検討されました。

- ① 耐震補強をせず現庁舎を当面継続使用
- ② 現庁舎を耐震補強
- ③ 現在地で新築
- ④ 旧市民病院建物を改修して再利用
- ⑤ 旧市民病院敷地で移転新築
- ⑥ 旧県立有磯高校校舎を改修して再利用
- ⑦ 旧県立有磯高校体育館を改修して再利用

(3) 市庁舎の整備方針

整備にあたっては、市の財政負担を考慮し、既存の建物を改修・再利用することにより整備に要する初期投資を極力軽減することが求められていました。また、長年の懸案であった庁舎の分散配置の解消や駐車スペースの不足の解消といった課題の解決も併せて図る必要がありました。

加えて、防災拠点施設としての機能強化を図り、津波浸水想定区域を避けるとともに、市民病院など他機関との連携や災害時における幹線道路網へのアクセス等に留意する必要もありました。

さらには、整備のための必要な財源の確保が求められていました。

以上の条件を満たす選択肢は、廃校となった「⑦旧県立有磯高校体育館を改修して再利用」であり最も実現性の高い有力な整備方針として決定されました。

体育館や校舎を市庁舎にするという、全国的にも類をみない試みは、「使われなくなった既存の公共施設を改修し、有効に活用する」ことで費用を抑えながらも安全性と市民サービスの向上を実現したこれからの公共施設のあり方の新たな提案となりました。

(4) 市民との対話による庁舎づくり

市庁舎の整備にあたっては、体育館の現場を使って市民と行政が協働して考える「市庁舎デザインワークショップ」や市民のアイデアで庁舎前の空間の植栽プランを検討する「花と緑のデザインを考えるネットワーク会議」を開催し、市民との対話が随所で形になった全国でもモデルとなりうる庁舎となっています。

当初、市長室と副市長室は、大きな窓があって明るいアリーナの奥に計画されていましたが、ワークショップで話し合った結果、開放的なこの空間は、部署が横断的に意見をやりとりできる創造的空間に変更しています。市長室はB棟2階の入口横に変更され、壁面の一部にガラスを採用することでオープンな市政を表現されています。

また、天井が高い体育館は空調効率が悪いという難点がありましたが、B棟2階の上部には、軽量のテント幕を使った「船底型の天井」を整備し空調の効率を高めるとともに、アリーナ特有の大きなサイズの窓から自然光をふんだんに取り入れるなど、執務空間の快適性にも配慮しています。



一部ガラス張りの市長室



船底型の天井

(5) 新庁舎の概要

① 建物基本情報及び事業費

【本庁舎部分】

棟名	構造	延床面積	概要	
A棟	SRC造2階建	2,042.862 m ²	教育委員会、議場他	旧第二体育館
B棟	SRC造2階建	2,960.297 m ²	市民部、総務部、市長室他	旧第一体育館
C棟	RC造3階建	1,609.290 m ²	建設農林水産部他	旧校舎棟
D棟	S造2階建	165.085 m ²	エントランス棟	新築
E棟	S造2階建	249.075 m ²	B棟・C棟連結部分	新築

【附属建物部分】

棟名	構造	延床面積	概要	
F棟	S造一部RC造	404.471 m ²	倉庫、資機材庫、トイレ他	旧格技場
G棟	RC造2階建	373.937 m ²	市民会議室、厨房他	旧記念会館

【駐車場等】

市民駐車場 118台 公用車駐車場 39台 駐輪場 2箇所

② 建設事業費（予算額）

工事請負費	1,575,444千円
設計等委託料	50,321千円
用地費	300,000千円（実績289,745千円）
事務費等	12,998千円
合計	1,938,763千円

※ 国の補助事業を活用し、総事業費19億円のうち市の実質負担額は9億円に抑えることができます。



市庁舎



市庁舎及び市民駐車場

(6) 新庁舎整備の歩み

平成 23 年 10 月	市庁舎の耐震診断調査開始
平成 24 年 3 月	耐震評価書交付
6 月	市議会において市庁舎整備検討特別委員会を設置
10 月	市議会臨時会において市役所を移転する「市役所設置条例」と移転整備のための事業費を計上した一般会計補正予算を可決
12 月	氷見市庁舎移転整備工事基本・実施設計業務に係るプロポーザルを実施
平成 25 年 6 月	第 1 回「新市庁舎デザインワークショップ」を開催（10 月までに合計 4 回開催）
9 月	市議会で事業費を 3 億 9 千 6 百万円増額する補正予算を可決 新庁舎移転整備工事着工
12 月	富山県との間で用地売買契約締結 第 1 回「新庁舎の花と緑のデザインを考えるネットワーク会議」を開催（翌年 3 月までに 5 回開催）
平成 26 年 4 月	建築本体工事完了
5 月	外溝工事完了 開庁式

3 フューチャーセンターについて

フューチャーセンターとは、企業や政府などの組織が、所属組織や立場が異なる関係者を内外から広く集め、対話を通じて課題解決を目指すための施設、創造性を発揮しやすくするために工夫された空間デザインであります。

平成 25 年 4 月、市長に就任されたプロのファシリテーターである本川祐治郎市長は、旧庁舎は 45 年間使われてきたが、新しい庁舎は従来と同じことをするのではなく、これからの 45 年後を見越して、開かれた庁舎で対話のある市政、市民と政策を創りあげてゆく場を目指すこととしました。

1 階には、青、緑、黄のイメージカラーを配した 3 つの会議室を整備し、自由にリラックスした雰囲気の中、市民から活発な議論を引き出し、行政と協働によって発展的な提案を作り上げる空間として活用する



「地域協働スペース」を、2階には、「センター」、「キャンプ」と名づけた庁内の各部署が横断的に意見のやりとりができるブースを配置するとともに、「プレゼンテーション」、「ワークショップ」の2箇所のオープンスペースは、誰もが集い、新たな気づき・発見や学びの場とするなど、創造的な活動の空間として活用しています。また、フロア中央に設置した空調機には、ヒノキのルーバーや掲示板、ホワイトボードを据え付けています。これら対話空間をフューチャーセンターと呼んでいます。

地域協働スペースには、市民やNPOの方々がミーティングに利用し、職員と顔を合わせる機会が多くなり、協働・連携がやりやすくなってきたとのこと。今後も交流の機会を増やし市民との協働連携を強めるためにもフューチャーセンターでの話し合いを促進させる役割であるファシリテーターを育成し、フューチャーセンターでの事業化・政策化を目指しています。



センター



ワークショップ

◇ 委員所感

<横山すみ子 委員長>

廃校となった県立高校の体育館を市庁舎として活用している現場を視察し、担当者並びに本川氷見市長から、その経過や目標等について直接説明を伺いました。

「つぶやきをかたちに」という市長の信条をもとに、フューチャーセンターを柱とした、市民との協働で実現した市庁舎。様々な斬新な工夫で、体育館を居心地の良い庁舎に生まれ変わらせていました。

公共施設問題に直面している葉山町にとって、示唆に富む視察となりました。

<鈴木道子 副委員長>

2014年にオープンした氷見市役所新庁舎は、閉校となった高校の体育館をリノベーションするという画期的な庁舎で、若干の危惧を抱きながら視察に向かったのが正直な話である。

しかしながら、聞くと見るとは大違いで、正に真骨頂とも言える今回の視察であった。一言で表すならば、「居住空間の心地良さ」だ。

整備自体は市長自らが指揮を執り、市民と市職員が協働して行うワークショップを実施し、多様な市民の声を踏まえながら進められたそうだ。市民の提案により当初の設計プランが変更されることもあったという徹底したやり方であったそうだ。

各担当部局の適正な配置や市民側から見た動線の流れ、また合理的かつ快適な照明や空調の配置、椅子やテーブルなどの備品にいたるまで知恵と工夫が感じられるものであった。

米国の心理学者アブラハム・マズローの人間の欲求5段階の内、最も高次元の「自己実現欲求」が「市民のつぶやきをかたちに」の市役所のキャッチフレーズと合致した典型であると、強く印象付けられた。

「フューチャーセンター」とは、組織や立場が異なる関係者を広く集め、対話を通じて問題解決を目指す施設のことで、多岐にわたる課題疑問を抱える私には大変に興味のある視察であった。

<畑中由喜子 委員>

氷見市の現市庁舎は、廃校となった高校の体育館を改築したものです。

広々とした駐車場を備え、いたるところに工夫が施された市庁舎は、まさに未来志向の「フューチャーセンター」と呼ぶにふさわしいものと感じました。市庁舎のリノベーションに当たっては、そこで長く働くことになる職員のモチベーションが上がるように、計画の段階で意見を取り入れたとのこと。市庁舎内には、あちこちにホワイトボードがあり、いつでも議論を書き留めることができるようになっています。縦割りの職員構成を超えて、必要な役割の人が集まって、すぐさま話し合いができる場づくりはうまく機能しているように見受けられました。

「フューチャーセンター」とは、組織や立場の異なる関係者を広く集めて対話を通じて問題解決を目指す施設のことで、氷見市では、新市庁舎で「市民のつぶやきをかたちに」をキャッチフレーズに、市民との連携を重視した、行政運営をしているとのこと。

こうした行政運営は、人材登用や組織構成にも反映しています。私たちの視察に丁寧に説明し、案内をしてくれたのは、「観光交流・若者と女性の夢応援課の若者・女性が夢を持てるまちづくり担当の若い女性主事でした。彼女の前任は保育士とのことで、ホワイトボードにササッと分かり易い絵を描いてくれました。

今後、人口減、財政の縮減、公共施設の老朽化が進む中、これからのまちづくりを考えると、市民とともに進めるまちづくりが欠かせないことは明白であり、今回の視察ではさまざまなヒントが得られました。「ハードからソフトへ、ソフトからハードへ」の精神を葉山町でも活かしていければと思います。

<石岡実成 委員>

富山県氷見市の「体育館を新庁舎にリノベーション」したという視察は、本当に素晴らしいものだった。基本的な外観はそのままで、効率よく再利用されている仕組みは、今後の葉山町の公共施設問題にも大きく関わってくる事業で、避けて通れないものである。特筆すべき点は、デザインやレイアウト等、細部に渡り、市民と行政の協働で進められたプロジェクトであるという事で、その成果が随所に現れていた。幾度となくワークショップを重ね、最先端の企業オフィスも視察し、未来を予測しつつ、50年先の行政の在り方まで考えたという話に、ワクワク感を覚えた視察であった。

<伊東圭介 委員>

2014年5月に廃校となった県立高校の体育館を市庁舎にリノベーションした氷見市役所を訪問しました。全国で初めてのことであり話題を呼んだ施設で、オープン以来1年間で既に3,000人以上が視察に訪れたとのことでした。市民と専門家を交えてワークショップを重ね衆知が集められた斬新な空間は、働く職員の意識や動きにも変革をもたらしたそうです。

氷見市長の本川祐治郎氏は、「市役所は、『幸せ創造商社』であるべきで、市民の幸福を追求するために公民連携で課題解決を目指す。」と述べていました。

本町においても、公共建築物の耐震化や老朽化により存廃の問題が現

実化してきており、公共施設等総合管理計画策定にも氷見市における取組が課題解決の参考になると思いました。

「フューチャーセンター」とは、組織や立場が異なる関係者を広く集め、対話を通じて問題解決を目指す施設のことです。氷見市では、この市庁舎の中に対話とコミュニケーションを生み出す創造的空間を作り上げていました。この場所を利用して市長のキャッチフレーズである「市民のつぶやきをかたち」を実践し公民連携による事業化・政策化を目指していました。

<土佐洋子 委員>

廃校となった高校の体育館をリノベーションして市役所の新庁舎とした、自治体では全国で初めての「フューチャーセンター」（組織や立場が異なる関係者を広く集め、対話を通じて問題解決を目指す施設のこと）。

もし市庁舎を新築した場合約 50 億円の建築費がかかるところ、リノベーションで約 19 億円ですんだとのこと。

市役所全体がオープンな庁舎でいろいろな意見が生まれる。

縦割りということもなく、課と課の隔たりもない。

委員会を終えて市長自ら熱くご説明していただきました。



本川祐治郎市長を囲んで

◇ 株式会社^{みそぎがわ}御祓川視察の概要

中心市街地のまちづくりについて（七尾マリンシティ構想）

1 七尾市と御祓川

能登半島のちょうど付け根に位置する七尾市は、万葉時代から港町として栄えてきた能登の中核都市であります。御祓川は、かつて七尾城が城山にあった頃、港とまちを結ぶ小運河として建設された七尾の中心市街地を東西に分ける川であり、市民の様々な生活シーンの舞台として流れ続けています。

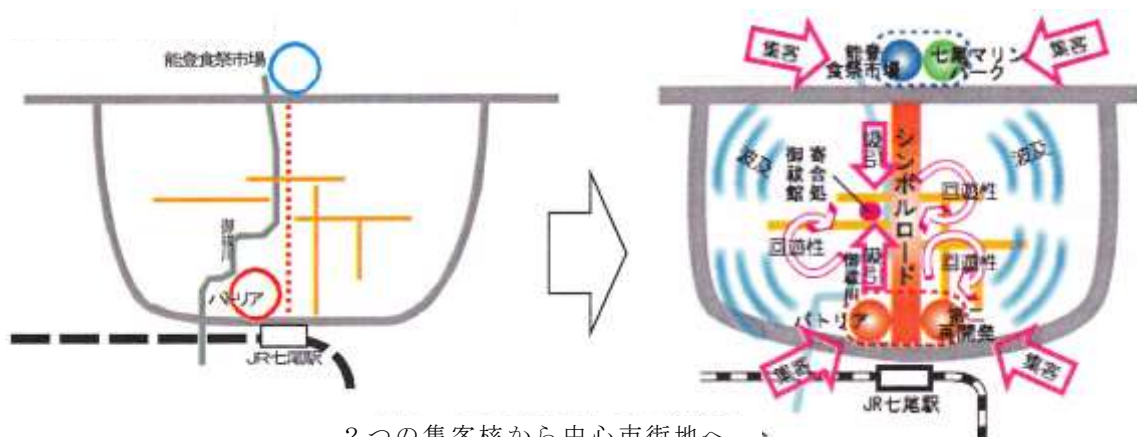
旧暦6月晦日に夏越の大祓い神事がこの川で行われていたことから、このような美しい名前がついたと言われてしています。しかし、実際の御祓川は河口付近の地盤沈下で流れがよどみ、周辺的生活排水の流入でますます水質汚染が進み、名前とは裏腹のドブ川となっています。

2 七尾マリンシティから憐御祓川へ

昭和60年ごろ、当時の（社）七尾市青年会議所が政治的にも経済的にも落ち込んでいた七尾において、「海・港」から「まち・経済・市民意識」を再生する「七尾マリンシティ構想」を打ち出し、能登食祭市場という港の拠点をつくりあげました。この「食祭市場」を港の拠点とし、七尾駅前再開発で整備した商業ビル「パトリア」を駅の拠点として、2つの集客核をシンボルロードで結んで軸をつくり、さらに中心商店街に賑わいを広げていこうという二核一軸構想がマリンシティ構想におけるまちづくりのシナリオでありました。

しかし、軸上に流れる御祓川は汚染が進んでおり、2つの核を結ぶ軸づくりにあたっては、この御祓川の再生が不可欠であると考えた企業経営者らが設立したまちづくり会社が「株式会社御祓川」であります。

なお、平成11年6月に出資者は8名、資本金5,000万円（現在は増資され出資者19名、資本金6,800万円）の民間出資のみで設立されています。



2つの集客核から中心市街地へ

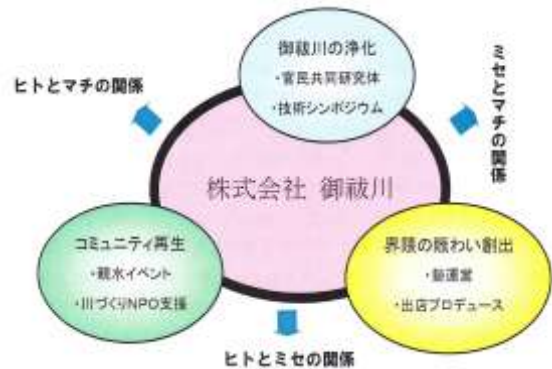
3 御祓川の事業内容（設立～平成 15 年頃）

御祓川の再生を 3 つの側面から捉え次の事業を展開しました。

(1) 「御祓川の浄化」に関わる事業

① 御祓川水質浄化ワークショップ

水質浄化技術を持つ企業へ呼びかけ、御祓川浄化方式の提案を元にシンポジウムを開催し検討内容を県及び市へ提案してヘドロの除去など公共事業化につなげています。



② 御祓川浄化研究会

平成 14 年の冬に「考えよう！川とまちづくり」というテーマでシンポジウムが開かれ地元の商業高校の教師がパネラーとして、生徒による御祓川浄化方策の提案を発表しました。川に空気を送り水中の好気性微生物の働きを活性化させることによって川の自浄能力を上げようというものであります。この方法を実際に川で実験するために、石川県、七尾市、川への祈り実行委員会などの地元の官民に加え、金沢大学、いしかわ水辺再生研究会より専門家を迎え、共同研究体として御祓川浄化研究会を発足させています。初年度は、全くの手弁当で始めた実験も 2 年目からは助成団体や市からの助成金を受けて、直接川に空気を送り込む方式から川に流入する前の排水路の水を浄化してから流す形に改良されています。さらに専門家のアドバイスを受けながら植物による浄化装置「ビオパーク」も取り入れ市民が関わりやすく浄化能力の高い実験装置が稼動中であります。

また、川との関わりを重視した浄化のアイデアとして、ビオパークで育つクレソンでケーキを作って販売し、クレソンケーキが 1 リング売れると 100 円が「川の祈り FUND」に寄付され、浄化装置の維持管理に使われる仕組みとしています。



植物による浄化施設ビオパーク



クレソンケーキによるおいしい浄化システム

(2) 「界隈の賑わい創出」に関わる事業

川沿いに質の高い店をつくり、街の側から川を再生し店を通して人々の賑わいを創り出しています。

① 寄合処 御祓館の整備

TMOである七尾街づくりセンター(株)との協働によって創業インキュベーター施設整備事業として新規開業者のための貸店舗を御祓川沿いの拠点施設として整備しています。

② 暮らしっく館 葦・いしり亭(直営店)の運営

(株)御祓川の直営店として工芸品店と飲食店を運営しています。

飲食店では食べることを通じて水の大切さをアピールし、工芸品店では地元の工芸品を紹介することで能登の生活文化を川沿いから発信しています。

③ 御祓川2号館への出店プロデュース

御祓川界隈に訪れる人を惹きつける魅力的な店をプロデュースしています。1階には、麺類・定食を中心とした飲食店、2階に誘致した美容室では、川沿いに移転するにあたって、パーマ液等の排水を無害にして流すシステムを取り入れるなど、川のあるまちで商売をさせていただくという基本的な姿勢を貫いています。

(3) 「コミュニティ再生」に関わる事業

川のことを思い、まちのことを思いながら行動する人々のつながりをつくっています。

① 川への祈り実行委員会

(株)御祓川が設立された翌年に川づくりのNPO法人として設立されました。コンセプトは「川と市民の関係を取り戻す」、「川再生に関する情報の収集・発信」、「川再生を願う市民の輪を広げる」として「川はともだち」を合言葉に幅広い市民の参画をサポートしています。

② 七尾湾沿岸全住民会議の事務局

七尾湾の浄化に取り組むNPOの事務局を担当し、必要に応じて川の祈り実行委員会や御祓川浄化研究会と協力して事業を展開しています。

③ 全国ドブ川市民サミットの企画運営

全国の都市河川の再生に取り組む先進地からの参加を得て、平成12年にシンポジウムを開催し、ドブ川市民サミット宣言を採択しています。

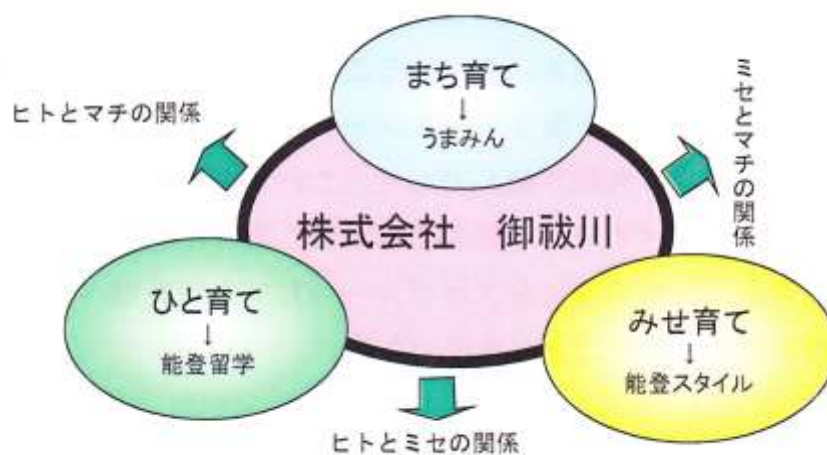
4 ㈱御祓川 現在の事業内容（平成19年以降）

平成19年3月25日、M6.9の地震が能登半島を襲い、七尾市も震度6強の揺れがあり、人的被害や家屋の損壊が発生しました。この地震をきっかけにまちづくり会社としての事業内容は大きく舵を切ることになりました。同年、現社長が㈱御祓川の経営を引き継ぎ、改めてまちづくり会社の存在意義を問い、経営ビジョンをとりまとめています。

御祓川の浄化に取り組むということは、水というかけがえのない恵みに感謝し、自然資源の循環を目指すことであり、川沿いの賑わいを創出することは、まちの文化に支えられた地元資本の可能性を伸ばし、地域経済の循環を目指すということです。また、川を中心としたコミュニティ再生とは、まちへの想いを次世代へとつなぎ持続可能なまちづくりを支える思想を受け継ぐ地域の人財を育てていくことです。

このように、㈱御祓川の実業は、3つの循環をつくることによって、人とミセとマチの関係の正常化を目指していくものであります。

同時に、「川沿いから能登へ」という中期事業方針を掲げ、川沿いから「能登」全体の活性化を意識した事業展開を図り、経営ビジョンでの基本的な考えを確認し、事業の3つの柱を「まち育て」、「みせ育て」、「ひと育て」として位置づけ直し、それぞれの部門での次の新規事業をスタートしています。



能登半島地震以降の事業内容

(1) まち育て：御祓川の浄化

- ① 能登旨美オンパク「うまみん」
 - ・着地型観光プログラムの開発
 - ・同時多発開催とプロモーション
 - ・担い手の育成
 - ・新商品、新サービスの支援

- (2) みせ育て：界隈の賑わい創出
 - ① 能登スタイルストア
 - ・能登の特産品お取り寄せサイト
 - ・能登の中小・零細企業の地域商社機能
 - ② 新商品開発
 - ・能登の赤なまこ石鱈
 - ・能登紅茶他
- (3) ひと育て：コミュニティ再生
 - ① 長期実践型インターンマッチング「能登留学」
 - ・受入企業開拓
 - ・コンサルティング、学生メンタリング

◇ 委員所感

<横山すみ子 委員長>

まちづくりを進める市民グループは全国各地に多くありますが、株式会社化して活動している例は少ないため、石川県七尾市の株式会社御祓川を訪問しました。

七尾駅近くの御祓川周辺に事務所があり、パワフルな女性社長からお話を伺いました。

民間まちづくり会社として、様々な主体との協働によって、川沿いから能登のまちづくりを進めているとのことでした。その中で、今回は七尾市の中心市街地のまちづくりを主に説明を伺いました。

説明の後、御祓川沿いに整備された状況を拝見し、その後、海近くの食彩市場も見学することができました。

<鈴木道子 副委員長>

1985年頃から展開された「七尾マリンシティ」運動にさかのぼる活動は1999年に出資者8名資本金5000万円の民間まちづくり会社（株）御祓川として、出発しました。「御祓川の浄化」と「界隈の賑わい創出」と「コミュニティ再生」の三点を目指しました。

御祓川という一本の汚れた川の再生からまちづくりに取り組むことが、単に市街地の活性化に留まらず、自分たちの生活や社会を再構築することだとの大きな意義を見出した事が成功の要因だと感じました。

水質の改善を競うことに、子供達も参加し流域の家庭への呼び掛けや

チラシの手作りなど、取り組んだそうです。

地元の高校生も参加したシンポジウム開催から石川県をはじめ地元の産官民が加わる広範な活動隊と発展して行きました。

まちづくりを推進する2つのタイプ「まちづくり会社型」と「ワークショップ型」を融合して推進するのがあるいは、場面ごとに使い分けていくのか、今回の視察で、整頓された活動形態を直接学ぶことができ、葉山町の協働活動形態に大いに参考になりました。

<畑中由喜子 委員>

七尾市では、政治的にも経済的にも落ち込んでいた町の再生に向けて、1985年ごろから、当時の(社)七尾青年会議所が「マリンシティ構想」を打ち出し、まちづくり活動が始まったとのこと。

市の中心を流れる汚れた御祓川の再生～中心市街地のまちづくりへの取り組みを目指して、1999年に出資者8名資本金5,000万円で、民間まちづくり会社(株)御祓川がスタート。

御祓川の浄化、界限の賑わいの創出、コミュニティの再生を目指した。それぞれの取り組み内容は、発想豊かなもので、例えば「御祓川の浄化」に関しては、水質浄化のためにクレソンを栽培し、育ったクレソンを使ったケーキを販売して、住民の意識を喚起するといった具合。また、「コミュニティの再生」では、川への祈り実行委員会を立ち上げ、実際に神事を伴う「御祓川祭り」を創設し、日本古来のまちとヒトの関係を取り戻す試みとした。以来、様々な取り組みを展開し、町への想いを次世代へとつなぎ、持続可能なまちづくりを支える思想を受け継ぐ地域の人材を育てることを目指すという。

最も、特徴的なのは、この取り組みが民間の会社によるものであること。とかく、お仕着せになりがちな行政の取り組みと違い、その豊かな発想と工夫、一人最低500万円以上という出資額の思い切りの良さには、ただ脱帽です。

このような取り組みがどこでもできる訳ではありませんが、町への強い想いがその根底にあると感じます。まちづくりの基本は、地域コミュニティの再生にあると改めて強く認識しました。

<石岡実成 委員>

石川県七尾市で訪れた、株式会社御祓川では、「民間企業が進めるま

ちづくり」を学んだが、その町のシンボルをいかに理解し、いかに活用しながら、まちを再生・発展させていくのが鍵になるというものだった。これは、葉山町においても同様であり、地方創生には、商工業の再生・発展が欠かせないという点では、嘗てない方式や試みを学べたことで、葉山式へ活かせる糸口の一つとして、充分参考になるような事業やシステム構築があった。行政に頼り切らない発想は、非常に大切で、今後の商工活動に取り入れて行きたいと思った。

<伊東圭介 委員>

石川県七尾市にある民間まちづくり会社(株)御祓川を訪問しました。

非常に興味深く、楽しい話が聞けました。NPOではなく、株式会社として事業を行うことなど、既定路線ではないところが参考になりました。事業内容は、まちづくりに関するコーディネート、コンサルティング、人材育成など幅広く行っていました。

氷見市でも同じことを感じましたが、「自分が関わって、自分の地域の問題を解決する」＝「幸福度が高い」ということであり、これはまさに「政治参加」であるということです。

<土佐洋子 委員>

'85 頃から当時の七尾 JC が中心となって政治的にも経済的にも非常に落ち込んでいた七尾において「海・港」から「まち・経済・市民意識」を再生する「マリンシティ構想」を打ち出した。御祓川を中心に「食祭市場」を港の拠点とし商業ビル「パトリア」を駅の拠点とした。

日本地図を転回して見方を変えるだけで意識を変えることができるということで、実際に地図を見てみると本当に意識を変えることができとてもポジティブになれる感じがする。

民間まちづくり会社(株)御祓川が設立され、世界に通用する考えかたなどを発信し、自分が関わって自分のたちの地域の課題を解決するということを進めています。

以上、ご報告いたします。

平成 28 年 10 月 13 日

総務建設常任委員会